



医療法人近森会

発行 ● 2006 年 8 月 25 日

びろっば 9

Vol.242

www.chikamori.com 〒780-8522 高知市大川筋一丁目 1-16 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者 ● 近森正幸 / 事務局 ● 川添昇

近森会医療安全研修とセミナーの開催

医療安全教育の第二ステージ開幕



右は青木千利医療安全担当看護師長
左に医療安全委員会 山崎正博委員長

例の集積と分析、医療安全に関する各種マニュアルの作成・改訂、院内外での医療安全セミナーの開催のほか、院内研修会を定期的に開催してきました。

ヒヤリ・ハット報告の分析から、医療事故につながる大きな要因として、①知識不足、②各種作業時の確認ミス、③情報の共有・伝達ミス、があげられます。

これまでの医療安全教育は、これらの要因について講義形式で行いましたが、成果が十分に上がっているとは思えません。受講するのではなく、自ら参加して意見を言い、自分たちで結論を見つけ出していくという参加型の形式を考えて、今年度から実践しています。そのひとつが病棟での参加型

の医療安全カンファレンスです。各病棟を巡回して、該当事例を参加者中心に分析し解決法を見出してもらう方法をとっています。またセミナーも参加型の危険予知トレーニングを年2回開催する予定です。

安全先取りの技法を学ぶ

医療安全担当 看護師長
青木 千利

受講から主体参加へ脱皮

医療安全委員会 委員長
近森病院 神経内科部長

山崎 正博

近森会で医療安全委員会が発足して7年が経過しました。この間、各種事



▲実技を中心として初めてのグループワーク形式で行なわれた医療安全セミナーの一場面

ストレス

近森 正幸



今年に入って、1月からの手帳をめくってみると、ウイークデーはもちろんだが、土曜、日曜の休日は一日の休みもなく、なんらかの会合や県外出張が入っている。

とくに今年秋の電子カルテ導入に向けて、細かな打合せや準備で、殺人的な忙しさである。講演会を始め、人に会ったり、挨拶をしたり、物事を決めていくというのは、たいへんなストレスを感じさせる。

人によってはこうしたストレスによって、とつぜん心筋梗塞や脳梗塞

を起こしたり、一晩で髪が抜けたりする人もいる。こんな状況で、一つひとつクヨクヨと気にしていたらストレスで押しつぶされてしまうので、出来るだけ気をつかわないようにしている。

病院主催の会とかは出来るだけ担当の人たちに細かいことをお願いして、挨拶とか講演が必要ときはパッとして、後は気楽にしている。最近必要に迫られて、心の切替えが上手くなったようである。

東京や大阪に出張するときは、機会を見つけて、たとえば椿姫やドン・ジョバンニなどのオペラ、レオナルド・フジタの展覧会、三輪休雪の陶芸展などの作品に出来る限り接するようにしている。こうした偉大な人間の足跡を感じることで、人間的にも社会人としても豊かになり、ストレスの暗雲の上に這い上がれるのでは、と願っている。

(理事長・ちかもり まさゆき)

去る7月15日、中央労働災害防止協会ゼロ災推進部から講師をお招きし、医療安全セミナーを開催した。今回は、「危険を予知し、安全を先取りする技法を学ぶ」のテーマで、安全の基本となる職場風土づくりの考え方、職場上司の監督者としての役割についての講義の後、実技を中心とした初めてのグループワーク形式であった。ヒヤリ・ハット事例に、実現不可能な模範的な対策を記載するのは異なり、あくまでも実現可能な具体的対策を、参加者の合意のもとに目標に掲げるというものである。

イラストや事例から、潜んでいる危険因子を出し合い、ポイントを絞って、その危険を回避するための手法訓練である。

今回の参加者は、医療安全委員、セーフティーナース、看護部所属長

※1面から続きます。

を対象とし、現場での自主活動を目的としたものであったが、日曜を挟んだ2日後には早くも現場で伝達講習を行ない、安全を誓うタッチ＆コー

ルの声が聞こえてくる部署があった。即、反応し行動に移す所属長の姿勢が、今回の研修の開催を決定させてくれた。担当者として準備しながら今回の準備に取りかかっている。



▲近森理事長講演後、活発な意見交換も行なわれた

クリニカルパス大会開催

8月4日(金)に第2回近森病院パス大会見学会、8月5日(土)には近森病院第15回クリニカルパス大会が開かれました。

初日の見学会では日本クリニカルパス学会会員の方々にご参加をいただき、近森理事長より「これからの地域医療のかたち—高知から見てきたこと」と題しての講演、続いて高橋脳神経外科部長(クリニカルパス委員長)より「パスと地域連携、DPCとの関わり」、尾知6西病棟看護師長より「近森病院のパスの運用」についての講演がありました。質疑応答の後、なごやかに情報交換会を催して散会となりました。



▲前で発表中の尾知看護師長と、それを受けて発言中の高橋クリニカルパス委員長、右後ろには司会進行を務めた川添管理部長

第15回 公開クリニカルパス大会の報告

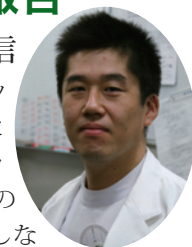
整形外科科長 西井 幸信

8月5日、高知会館において第15回公開クリニカルパス大会が開催されました。今回のテーマとして全人工膝関節置換術の連携パスを近森リハビリテーション病院のスタッフの方々と共同で作成し、発表させていただきました。当日は院外から約70人、院内から約150人と多くの方に参加していただきました。ベンチマークでは活発な意見が飛び交うであろうと予想していましたが、意外と静かな討議でした。

クリニカルパスの利点の一つに「多職種参加によるチーム医療」という考え方がありますが、今回のクリニカルパス大会に向けて、リハビリテーション病院のスタッフの方々と共同で連携クリニカルパスを作成しましたが、日常

診療の場でディスカッションすることがほとんどない部門のスタッフの方々とそれぞれの立場や考え方を主張しながら討論する機会をもてたことは、非常に新鮮で有意義であったと思います。

クリニカルパスはインフォームドコンセントの要素が強いと思われていますが、それだけではなく、治療成績、在院日数、医療コストなどを大きく左



右するような重要なアウトカムはクリティカルインディケーターとしてバリエーション分析を通して、より適正な医療、あるいは医療の標準化がなされるためのツールとしての側面を持っています。

10月からの電子カルテ導入に伴い、クリニカルパスはさらに発展させていく必要があると感じていますが、今後はクリニカルパス大会の参加だけでなく、クリニカルパス作成の場に種々のスタッフが積極的に参加していただけたら、クリニカルパスへの理解がより深まるものと思います。



▲担当の後列左から、三石Dr、西井Dr、市川(医事課)、武市Ns、刈谷PT、和田Ns、中山Dr、窪川Dr。前列左から、高橋Dr、西本MSW、黒岩Ns、近藤Ns、久保田Ns、田元Ns



▲220人の皆様にご参加をいただいた



なにげなくある癒し

最近妹の家に新しい家族が増えました。白と茶色のスマートなおス猫で、今の私の「癒し」です。家にきた時には、あまりに小さくおス猫やらメス猫やら判断が付かなくて、おスなら「ハチ」、メスなら「ナナ」と2通りの名前を考えたことでした。結局、おスにも拘わらずメス用の名前が選ばれたのです(現状をお察ください)。

以前実家でも茶トラのおス猫を飼っていて、トム・クルーズのようなオトコマエになれるという願いをこめて「トム」と名付けました。(残念ながら、名前負けしたのか

▶名前はナナ。見た目は凛々しい男前なのですが……



おとなしいオカマ猫になってしまいました……)。

今では、妹の家に行くたび、ナナを追いかけてまわっています。彼は正直迷惑そうなのですが……。

黒川温泉のひなびた露天風呂めぐりや、ヨーロッパの美しい町並みなど日常から離れた楽しみや癒しも大好きですが、日常の中になにげなくある癒しも大切だと思うこの頃です。

(新館5階東病棟看護師長 西岡成巳)

昇格しました。

乞

熱烈

応援

副院長就任の覚悟

近森リハビリテーション病院 中山 衣代^{きぬよ}

4年前の6月1日にリハビリテーション科長の辞令を理事長室でいただいてから、どんな仕事が出来ただろうと振り返る間もなく、日々の業務に追われているうちに、このたび平成18年7月1日付で、近森リハビリテーション病院副院長という辞令をいただきました。

この4月以来の診療報酬改定と10月からの電子カルテの導入をひかえ、新しい院長を迎えての近森リハビリテーション病院新時代の幕開けにあたり、今後自分がどのように動けばいいのかを模索していくなかで重い責任を感じます。

科長としての振り返りを、個人的には出来ないままの更なる責任をいただいたという感じですが、これまでの役割にプラスして、もっと広く病院全体を見渡せる処に行くと、ハッパをかけていただいたように覚悟しております。つまり、業務の効率化を図り、職員全員が一致団結して楽しく仕事をしていける病院になるための一翼が担えればと覚悟をした次第です。

とはいえ、なにぶん雑な性格であり加齢現象もあるため、皆さまのご指導により、職務を果たしていけるものと思っておりますので、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

必要とされるよう存在する！

誰もが自分の住みたい地域で、自分らしく生きていくことができる地域づくりをしていこうという地域リハビリテーション理念の啓発、活動を推進していくために生まれた部です。退院していく患者さんや地域で生活している障害者の希望する生き方が実現できていないのは、社会制度や環境に問題があるのか、個人に問題があるのか、それらの課題解決に向けて具体的に考え、社会参加へとつながるような取り組みをしていきたいと思っています。

また、院外の関連機関や地域との連携を図り、院内には情報提供を怠らず、スタッフから「地域リハビリテーション部」と呼んでもらえるよう務めていきますので、宜しくお願い致します。

近森リハビリテーション病院
地域リハビリテーション部室長 上田 真弓^{うえた}

▲2006年8月1日、高知女子大の皆さんとユニバーサルファッション関係の勉強会を開いた際は、いつも乍ら「元締め」を務めた

院外エッセイ

山を歩く楽しみ

高知勤労者山岳会所属 奥代 富美

おくだい ふみ 1958年高知県生まれ
大学入学後、クラブ活動で山歩きを始める。初めて行った4月末の大菩薩峠ハイキングで残雪を踏み、5月の八ヶ岳から見た雄大な眺めにすっかり山の虜になってしまった。卒業後も年に数回の山歩きを続けてきたが、今では四国の山を中心に月に2～3回は山に出かけている。

山歩きをはじめて、かれこれ30年近くがたってしまいました。学生時代にサークル活動を通じて「登山」に親しまましたが、このときに自由な雰囲気の中で気の合う仲間と大地を歩けたことが、山歩きを好きになり、今まで続けてこられた理由ではないかと思っています。キスリングと呼ばれる横長の大きなザックをかついで、東北や北海道、そしてアルプスの山々を何日間もかけて歩いた体験は、貴重な青春の思い出です。

登山は、本来危険を伴うスポーツであり、体力や技術も求められます。しかし私が日常的に好むハイキングや縦走では、地図を広げ地形を読みながらコースを選び計画を立てるという旅の要素も多くなってきます。旅の楽しさはまず計画することから始まっています。地図帳を広げたり時刻表をながめることが好きでしたから、こんなところも決してスポーツ好きではなかった自分が山歩きに魅かれた理由のひとつだろうと思うのです。そしてなによりもいい山仲間に出会うこ



とことができました。一人歩きの気楽さと緊張感も好きですが、仲間と一緒に歩くことほど楽しいことはありません。山歩きは疲れます。下山したら足はむくみ、筋肉痛でロボット歩きのようにになってしまうこともたびたびです。それでも山旅を終えていつも実感するのは、「歩くことは楽しい」ということです。四季おりおりの野山を歩くと、空の青さや流れる雲、色鮮やかな花々、樹層の移り変わり、雪の白さなど、素直にきれいだなあと感動できます。あたりまえのことをあたりまえのように感じられることが少ない今、山を歩くことは私を素直にさせてくれます。残暑きびしい高知の街にいても、山は涼しいだろうと稜線を渡る風に思いを馳せることができます。

この秋、仲間と計画している初めてのネパールトレッキングで、ネパールの山を歩くのをとても楽しみにしています。

横隔膜を穿孔部に補強し 救命できた貴重な一症例も

消化器外科部長 北川 尚史

7月7日に第67回救急医療症例検討会が近森病院で開催された。今回は外科の症例のなかで上部消化管穿孔2例を発表した。

一例目は比較的稀で、診断、治療



▲左から進行を務めた根岸 ER 部長、高知赤十字病院の西山 ER 部長、高知市中消防署の江口救急救命士、嶺北消防署の西村救急救命士、北川消化器外科部長、八木消化器外科部長

が遅れると救命するのが困難となる特発性食道穿孔の症例であった。この症例は特に中部食道に穿孔があったため通常の左側ではなく右開胸手術となり、食道穿孔部の縫合閉鎖後、横隔膜を穿孔部に補強し救命できた貴重な一症例であった。八木先生が要領良く、簡潔に症例をまとめられた。

続いて私が十二指腸潰瘍穿孔症例を発表した。症例としては珍し

くはないが、急性腹症として救急搬送され緊急手術となる件数が比較的多い疾患である。最近は腹腔鏡下手術が出現しその治療法が変わりつつある。その理由としては潰瘍に対する

治療が H₂ 受容体阻害剤、プロトンポンプ阻害剤の登場により格段に進歩し、さらにピロリ菌の除菌により潰瘍再発も少なくなっていることによる。腹腔鏡下手術による大網充填術のビデオを供

覧し、その診断、治療、手術等を紹介した。急性腹症についてもその診断、特に画像診断の重要性について説明した。またすべての急性腹症が開腹手術になるわけではなく、経皮的ドレナージ術、腹腔鏡下手術等の低侵襲手技が最近の傾向であることを発表した。



▲救急医療症例検討会会場のようす

ハッスル研修医 第二部 vol.4

ER1年目です。国家試験に合格して、早4ヵ月が経ちました。無事に研修医になれたわけですが、近森病院に勤めだした当初は右も左も分からず、病院になれるので精いっぱいでした。最初の3ヵ月は外科を研修させていただいたわけですが、研修をはじめて最初感じたのは、大学で勉強したことと実際の現場はだいぶ勝手が違うなということでした。学生の頃は5つの選択肢から1つの答えを選べばよかったのですが、実際の現場ではまず自分が選択肢自体を用意しなければならず、そのことに非常に戸惑いました。

そんな中で、徐々に近森病院自体にも慣れ、少しずつ自分なりに考えられるようになり、日々楽しく研修させていただいています。

選択肢

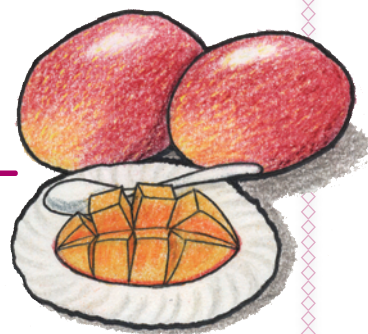
研修医
大槻 祐喜



一年次は ER・麻酔科、内科と研修させていただき予定です。やはり医者になっての最初の1年は非常に大切だと思います。この1年を充実したものにできるように、これからも自分なりに考えながら研修をしていこうと思います。おっちょこちょいで抜きの多い私を、いつも助けていただきありがとうございます。これからも多々ご迷惑をおかけするとは思いますが、先生方、スタッフの方々、どうぞよろしくお願い致します。

薬用酒アラカルト⑱

マン
ゴー
酒



ひろっぱ編集委員、大絶賛!!

トロピカルな香漂う、マンゴーのお酒に挑戦しました。今回使用したのはちょっと高価な高知県産のアップルマンゴーという品種で、外国産のものより小ぶりで丸く、果皮は赤味がかっており、濃厚な甘味があるのが特徴です。

<材料> (密閉容器 1L 分)

マンゴー …………… 400 g
ホワイトリカー ……… 600ml

<作り方>

① 流水でさっと洗って水気をふき取る。

② そのまま容器に入れ、ホワイトリカーを注ぐ。

③ 1ヵ月ぐらいから飲めるが、長く熟成させるほど風味が出て、おいしくなる。

※マンゴーには、ビタミンA、ビタミンCはもちろんカロチン、ビタミンB₁、ビタミンE、リンなどが含まれており、非常に美肌効果があるといわれています。また、基礎代謝を活性にして免疫力を高めるので、風邪にも効果があります。

漬け込んでから約1ヵ月半後のひろっぱ編集委員による試飲会では、「南の島の風を感じさせるような香」、「みずみずしい甘さ」、「ゴーギャンの『タヒチの女たち』が思い浮かぶ」、「トワイライトに一杯」など、感想をいただきました。

漬かっていた実は理事長の見事なメス捌きで解体し、皆で味見してみたところ、かなりアルコール分が強い感じでしたが、黄金色の果肉、マンゴーのなめらかな食感はそのままでした。

これまでの薬用酒ランキング第1位に輝いた「マンゴー酒」、ストレートでも、ロックでも、また炭酸水で割っても楽しめます。とっても簡単ですので、ぜひお試しください!

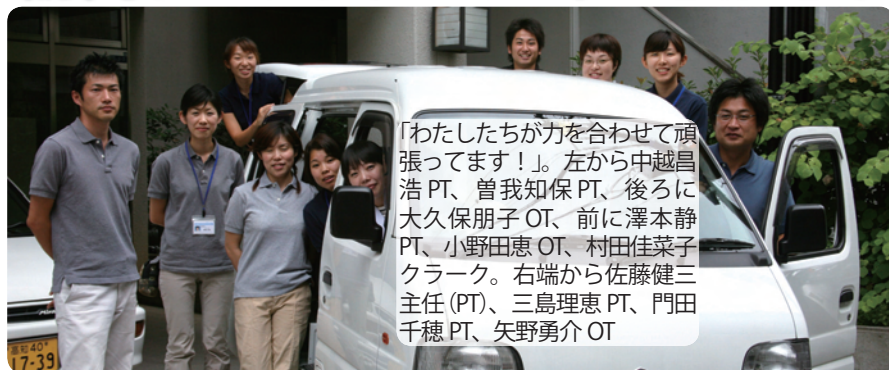
(文と画 嶋崎ユリカ)



訪問リハビリテーションちかもり

訪問リハビリテーションちかもり

主任 佐藤 健三



薬剤投与病院研修レポート 病院研修を終えて

仁淀消防組合消防本部 消防士長 伊藤 実

第3期薬剤投与追加講習における病院実習で7月24日(月)から5日間、近森病院ERでお世話になりました。実習では薬剤投与時に必要な静脈路確保や救急患者の観察～検査～処置という一連の流れをERスタッフの一員として経験させていただきました。

とくに根岸救急部長には多忙な中で静脈路確保に関し患者様への承諾や手技全般において丁寧に指導していただきありがとうございました。また、ご自身の手背静脈を穿刺させていただき申し訳ありませんでした。(先生の血管が硬かった?ののでしょうか…今度は腫れないよう上手くやります!)

また、同じく協力をいただいた山本主任はじめERスタッフの方々には、ひっきりなしに来る救急患者対応の傍ら私の実習のために条件の良い血管を捜していただきありがとうございました。ERスタッフの皆さまの優しさは忘れません、本当にありがとうございました。

アドレナリン投与症例は経験できませんでしたが静脈路確保が困難な患者様や、様々な救急症例を経験でき、自分にとって大変実りある実習でした。この実習を糧にし、更なる技術の向上と傷病者に対するいたわりの心を持ち続けて活動していきたいと思えます。

最後になりましたが、病院研修に際しご協力をいただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。

左から根岸正敏 ER 部長、伊藤救命士、近森院長



当法人における訪問リハビリテーション(以下、訪問リハ)の歴史は、昭和62年の継続医療室の発足にさかのぼる。

訪問リハがまだ制度上認められていない当時、諸先輩セラピストたちが休日を利用して患者さんの自宅に訪問し、寝たきりを防止するための支援を無償で行ったことが始まりである。やがて制度上認められ、平成4年からは老人訪問看護ステーションちかもり(現、訪問看護ステーションちかもり)からの訪問リハ活動が開始され長年継続してきた。

そしてこの度の平成18年度介護報酬改定において、特に介護保険対象者への訪問リハは、より効率的・効果的なリハビリテーションサービス提供といった観点から拠点を医療機関等に置き、病院等とより密な連携を図ることで患者さんがスムーズに自宅退院できるよう支援することが重視された。これに伴い当法人では、近森リハビリテーション病院内に訪問リハ事業所『訪問リハビリテーションちかもり』を設け、平成18年6月1日より活動を開始。

今後とも、患者さんの退院後の生活ができるだけ豊かなものになるよう、近森リハビリテーション病院スタッフと協業しながら、より良いシステムを構築していきたい。

れ あ い 看護体験 2006



毎年恒例の「ふれあい看護体験」で本年も7月25日(火)に学生さんが見えました!❤

看護部♡キラリと光る看護 その27 活きたOJT (On The Job Training)

今年4月の診療報酬の改定で近森病院は看護職員の実質配置7対1という最高ランクの申請をすることができました。これは平均して入院患者さん7人に対して1人の看護職員がいますという意味です。

平均してということは、例えば日勤時間帯の朝8時30分から夕方17時までは看護職員1人当たりの受け持ち患者さんは4人以内の病棟もあるし3人以内の病棟もあり、夕方16時30分から深夜0時までは1人のナースの受け持ちは7人あるいは10人以内とか、深夜23時30分から朝9時までは9人とか17人以内というように病棟により傾斜配置となっていることを意味しています。

この体制を維持するために今年の新人ナースには夜勤を4月の後半の土日から入ってもらいました。例年9月頃に夜勤デ

ビューをすることが多かったため、リードする方も、される方も本当に大変でしたが、まず患者の皆さまのご協力があり、次いで病棟師長、主任、リーダー、プリセプターナースその他全員の努力で事故無く経過しています。

口腔ケア、清拭、点滴与薬、手術や検査出しの準備、入院のオリエンテーションやアナムネ取り、どれをとっても大変な作業です。「どうしてこれをするのかという目的、必要物品、手順、注意事項、観察事項」などを対象を代えて繰り返し説明しながらモデル施行をするOJT(On The Job Training)の毎日でした。日々の看護の全てに、とくに採血や点滴注射の刺入時に我慢し耐えて下さった患者の皆さまに感謝して、回復への祈りの気持ちを言葉や笑顔や手でお返ししてください。(看護部長 梶原和歌)

「病棟必置制にむけて！」

2006年6月24日、今回が初めてとなる「全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会」のソーシャルワーカー研修会が開催され、全国から130人を超えるソーシャルワーカーが参加した。

近森リハビリテーション病院 ソーシャルワーカー

西本 奈加



急速に進む医療制度改革の中、回復期リハビリテーション病棟には急性期病院からの迅速な受け入れ・集中的なリハビリ医療サービスの提供・家庭復帰の促進という使命があるとされています。そして、急性期病棟・回復期病棟ともに在院日数が短縮される中で、退院後も地域でその人らしい暮らしができるよう支援するためには、個性性を重視したサービス提供や地域の関係機関との密な連携が不可欠であり、ソーシャルワーカーにはその役割が期待されています。

実態調査によると、一般病院など他の病床と比べて回復期リハビリテーション病棟にはソーシャルワーカーの配置数が多く（平均41床に1名）、そのうち4割程度が専従体制という現状です。それでも、ご本人ご家族との面接、カンファレンスへの参加、関係機関との連絡調整等など多くの業務があり、「もっと時間・人員が欲しい」という意見が多く聞かれました。研修会では、

グループディスカッションで広く他院の取り組みを知り、全体討議でソーシャルワークの基本を確認しながら、よりよい支援を行う体制作りについて考える機会となりました。

協議会ではソーシャルワーカー委員会が発足し、今後回復期リハビリテーション病棟の人員基準にソーシャルワーカーを位置づける取り組みがスタートします。平成元年の開院当初からソーシャルワーカーが全ケースに関わる体制を続けている当院の取り組みから発信できることが少なからずあると思っています。全国どの回復期リハビリテーション病棟にもソーシャルワーカーがいて、退院後もその人らしい生活を送ることができるようひとりひとりにあった調整が行なわれる……そんな体制作りのため、私も委員の一人としてできる限りの活動をしていきたいと思っています。

リレーエッセイ

ちょっと得した一日

医事課 武田知子

先日、広島からいとこ夫婦が遊びに来ました。高知といえばやはり桂浜、ということで、ドライブがてら桂浜案内をしてきました。

花海道から雄大な太平洋をながめながら（あいにくの天気で水平線がぼやけてましたが）、いざ桂浜へ。実は私、高知に住みながら桂浜は今回で2回目。坂本龍馬像はこんなに大きかったのか！と感心しながら、すっかり自分も観光気分です。

そして、龍馬像のたつ丘から、台風のテレビ中継でおなじみの龍王岬までの白浜の遊歩道を歩いたのですが、悪天候のため海が少し荒れていたのがなかなか迫力があり、これぞ土佐の海！という感じがしました。龍王岬からは今まで歩いてきた白浜と太平洋が一望でき、圧巻でした。

ところで、平日にも拘わらず観光客が意外と多いことに驚きました。ただ、最近は記念撮影するのもみんな携帯電話なんです。若い人はもちろん、結構年配

▼思いきり観光気分浸って、左が私です



の方まで携帯電話でパシャパシャ。便利になりましたが、でもせっかくだからもっと良いカメラで撮って行って欲しいなと思いました。暑いなか海辺を歩き回って、最後に飲んだゆずジュースがまたすっきりとした甘さでとてもおいしかったです。

いとこ夫婦も海がすごくきれいだと言って高知をとて気に入ってくれました。今度はよさこいの時期にも来て欲しいものです。いとこ夫婦を案内しながら、自分も旅行しているような、ちょっと得した気分を味わうことができた一日でした。

第34回 お知らせ 地域医療講演会

9月11日（月）17時30分～
会場 ホテルサンルート高知

NSTにおける 栄養療法の意義と課題

石原雄一郎先生（麻生飯塚病院栄養科主任）
林 勝次先生（麻生飯塚病院薬剤部主任）

第5回 公開県民講座

四万十会場

入場無料 申込不要

9月16日（土）午後2時～4時
四万十市文化センター大ホール

中年以降の くび・腰・膝の異常

あなたは調子が悪くて困っていませんか？

講演

- ①「股関節の痛み」
（変形性股関節症と関節リウマチ）
整形外科 科長 西井幸信
- ②「腰痛・下肢の痛みやしびれ感」
（変形性脊椎症と骨粗鬆症）
整形外科 部長 道中泰典
- ③「肩こりや手足のしびれ感」
（頸椎症）
整形外科 部長 西田一也
- ④「O脚と膝の痛み」
（変形性膝関節症）
整形外科 部長 衣笠清人

※お問い合わせは地域医療連携室へ

四万十の皆さま
お待ちしております！

● 9月の歳時記 ●

ススキ

文と画
第二分院5階病棟
下元 伸之



イネ科の多年草で、日本、中国、朝鮮の原産。秋に黄褐色の大きな花穂をつけ、これが「尾花」で秋の七草の一つになっています。



▲「穴蔵に居るみたいでしょ！」
いえいえ、とっても落ち着けそう。
窓いっぱいに見える緑は桜の葉、
葛島一丁目の、優雅な事務所です

▲ THINK 建築設計の前田博所長(左)と、「たまには記念撮影を」と山本義夫さん。事務所内での打ち合わせは、国分川と遥かに北山の稜線を眺めて快適なこの空間で行なわれることが多い



▲山本さん設計の代表作。上は大川村木製品展示場「木星館」。下は上等人冊子も創られている高知市朝倉の「たむら内科クリニック」の屋上プライベート空間のようす

空間の贅沢さを 求め続ける学究の徒

地域との共生を目指したピカピカの新築！というよりも、ずっとここに在ってしっかり町に馴染んでいますよ～！

近森病院第二分院の建物は押しつけがましくこんな風に主張はしないけれど、何だか懐かしい佇まいで、なおかつモダン、控えめなようで主張がまっすぐ伝わる。THINK 建築設計の山本さんを中心に設計された第二分院は、まるで山本さんの生き方や存在そのもので、それが形になっているようだ。

THINK の前田博所長がそうであったように、山本さんもやっぱり「小さい頃からモノをつくるのが好き」な少年だった。高知学芸高校3年のときデッサンを始め、谷岡久先生に美術部に入るよう勧められたというから、じつはその頃から目立った才があったのだろうが、「ひとりで好きなことをやる方がいい」と入部を断わった。これだけ聞くと付き合いが悪そうだが、250ccのバイクに乗って遊ぶ「フル仲間」はいっぱい居たし、周りど波風を立てるようなトンガリではない、穏やかな優しいお人柄であったのは、いまの山本さんを見れば十分想像がつかだろう。

造形をやりたいという漠然とした希望をもって武蔵野美術大学に進学し、ハタチの時、建築の道へ進むことを決意する。「抽象的な部分と具体的な部分と矛盾がどっさりあるなかで、それを何とか両立させたい」と「建築の拡がりや建築という抽象度の高さ」に、言うなれば「魅せられた！」のだろう。

建築家の町並みへのこだわり、生き方とどう関わるかの考え方、そこに住

む人が人生をどう考えるかといった「大げさなようだが生き方そのものに関わる方向性」を探していくなかで、大学院でもまた勉強を続けることになる。

25歳で大学院を卒業したとき、研究者の道も選択肢にはあったようだが、「面白いのがおるが、ほったらかしたらプーにでもなりそうやから雇ってやってくれ」と恩師の口利きで都内の建築設計事務所に就職。4年が過ぎた頃、前田所長とも共通の恩師に当たる教授が、東工大へ転任されることになり、「先生は武蔵美の我々を捨てるンや！」と「お慶びの会」を持った時、高校大学の先輩に当たる前田所長と、山本さんは初めてゆっくり話をする機会を得る。

が、まだ THINK 建築設計での仕事には結びつかない。お慶びの会の翌年、山本さんの父上が急死され、「いつまでも都会でわがままはできないし…」と、前田博先輩に「高知の様子をボクに教えてください」。そして、ここでとうとう同郷のお二人がやっと繋がることになる。

以来アツという間の20年、THINK 建築設計の右腕として、実験的なものから伝統を重視した和風建築までさまざま手掛けて今日に至る。

プライベートが想像しにくいようでもあるが、家族は「施主さんの紹介で結婚した」典子さんと、中学1年小学4年の二人の女の子のパパでもある。

建築という表現手段を持ちながら、「ものの贅沢さよりも空間の贅沢さ」を追求し続けるのが山本さんの仕事の醍醐味といえるだろうか。

若かりし頃を喩えて「ケンカの弱い暴走族」だったと照れる山本さんは、確かに一見迫力があって怖そうだけれど、じつは家族を深く愛するアウトドア派の学究の徒。その研究熱心さでどんな自宅を建てられたろうと興味津々だが、「施主さんと試せない実験を数々した」から、「残念ながらボクの家を見たら注文が減るかも知れません」。

ビールが美味いんだなあ～

臨床工学部
臨床工学技士
豊永 哲郎



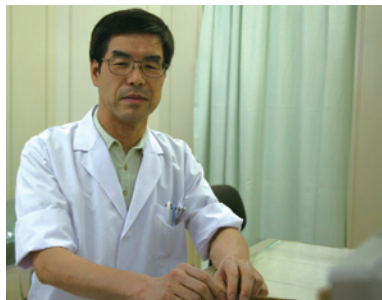
サーフィンを始めて6年になります。黒潮町の入野の浜で友人たち(サーフィンのお師匠様)と撮影しました。これまでもバレーボールや合気道などのスポーツにチャレンジしてきましたが、どうもじっくり来ず、サーフィンは数少ない趣味の一つとなっています。腕前は…というと、ひとさまに自慢できるほどではありませんが、私にとって海に入っている間は日頃の運動不足を解消し、ストレスも吹き飛ばし、ダイエットにもちょっと役立つ、とても大切な時間となっています。



シリーズ●クリニック探訪19

医療法人
岩河会

岩河整形外科

JR 土佐山田駅から車で 5 分
(土佐山田町百石町二丁目 4 番 20 号) ☎782-0035

院長・岩河基行（もとゆき）
S25年8月3日、香我美町生
まれ。趣味は野球



▲近森病院整形外科 OB の一人として、小さな外傷から大腿骨頸部骨折などの手術まで行なっています。

また、リハビリテーションやデイクケアにも力を入れています。介護保険のことをはじめ、どんなことでもお気軽にご相談ください。

tel. 0887-52-5000
fax. 52-3939

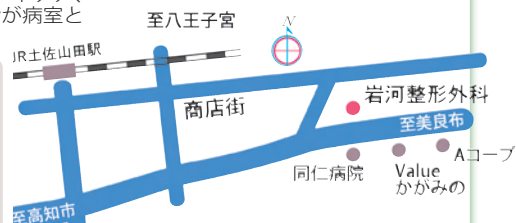
診療科目 ● 整形外科、リハビリテーション科
リウマチ科、麻酔科（岩河基行）

診療時間 ● 8:30 ~ 12:00
13:30 ~ 17:30

休診 ● 日曜、祝日

▲中庭で。左手がデイクケア、
右手に診察室、2階が病室と
なっている

※土曜日は、
15時30分まで



7月の診療数	近森会 外来患者数	19,084 人
	近森会新入院患者数	900 人
	近森会 退院患者数	891 人
	地域医療支援病院紹介率	86.02 %
	近森病院平均在院日数	14.39 日
	近森会 平均在院日数	21.55 日
	近森病院救急車搬入件数	489 件
	うち入院件数	226 件
	手術件数	321 件
	うち手術室実施	251 件
	全身麻酔件数	137 件

企画情報室より

図書室便り (管理棟図書室 7月受入分)

●MINIMAX FRACTURE FIXATION / BERNHARD G.WEBER ●YEARBOOK OF ANESTHESIOLOGY AND PAIN MANAGEMENT 2006 / DAVID H.CHESTNUT(他著) ●今日の診療のために ガイドライン外来診療 2006 / 泉孝英(編集) ●精神分析臨床シリーズ 摂食障害の精神分析的アプローチ 病理の理解と心理療法の実践 / 松本邦裕(編集) ●改訂四版 渡辺・中根 酵素抗体法 / 名倉 宏(他編集) ●改訂3版 よくわかる透析療法ハンドブック / 太田和夫(編集) ●脳卒中急性期治療とリハビリテーション rt-PA 時代のブレインアタック戦略 / 栗原正紀(他編集) ●国際疾病分類 腫瘍学 第3版 / 厚生労働省大臣官房統計情報部(編集) ●レセプト・カルテ記載のための ICD-10 対応 標準病名ハンドブック 2006 標準病名マスター ver.2.50 / 医療情報システム開発センター(編集) ●会社行事モデル全集(企画・運営・スピーチ)1,2 / 会社行事研究所(編集)

《別冊・増刊号》 ●別冊 医学のあゆみ 脳科学の先端的研究 一遺伝子から高次機能まで / 井原康夫(編集)

《VIDEO・DVD》 ●AUDIO - VISUAL JOURNAL OF JUA vol.12 No.3 / 日本泌尿器科学会(監修) ●VIDEO JOURNAL OF JAPAN NEUROSURGERY vol.14 No.3 / 日本脳神経外科学会(監修) ●Dr 岩田の感染症アップグレード 第1巻、第2巻 / 岩田健太郎(監修)

編集室通信

▼今年も梅雨が明け、毎日暑い日が続く「高知の夏」が到来したことを実感させる。とくに今年は、日中暑いせいで冷たいモノがおいしい。高知の夏といえば「よさこい祭り」があるが、その祭りに向けての踊りの練習を公園などでよく見かけるようになった。今年も全国から集まるチームの素敵な衣装や踊りを見て、高知の夏を楽しみたい。(なか潤)